

水牛通信

人はたがやす

水牛はたがやす

稲は音もなく育つ

エリシア

アリス・ウォーカー 2

映画時評

鎌田慧 24

キリコのページ

玖保キリコ 7

演劇時評

津野海太郎 26

三菱南大夕張炭鉱事故

二階堂泰 10

音楽時評

高橋悠治 28

工房訪問② スタジオ・アヌー

—インタビューという仕事

小形桜子

江崎泰子 12

料理がすべて番外

田川律 22

水牛かたより情報

30

エリシア アリス・ウオーカー

くぼたのぞみ訳

ある奇妙な経験が、エリシアの生き方を決めた。そしてそれ以来、灰の入った小さいな薬壺を片時も肌身離さずを持ち歩くようになった。

彼女の生まれた町に、昔一人の男がいた。男の祖先は、代々大きな農場の持主で、その土地は陽の光さえあたればどんな作物でも育つほど豊かだった。奴隷制度はすでに廃止されていた。

にもかかわらず、その農場には大勢の奴隷がいた。かつての奴隷所有者の孫にあたるこの男は、こと黒人に關しては実に古風な所有観を持っていた。もちろん黒人を大事にはした。だが、言うまでもなく、当時のやり方ではなく、彼の記憶の片隅にかすかに残っている祖父の時代のやり方で、という意味だ。

エリシアは直接あったことはなかったが、男は町の中心を走る賑やかな通りにレストランを開いていた。この地方ではかなり名が通った店だった。男

はこの店に「オールド・アングル・アルバート」という名前をつけて、店のウィンドウにアングル・アルバートそっくりの人形を置いた。それはワックスを塗った肌とギラギラ光る眼をした、小さいな褐色の人形だった。

作り笑いを浮かべた唇からは傷んだ歯列がのぞき、片手で被いのかかったお盆を肩のところに持ちあげ、もう一方の腕に白いナプキンを掛けた人形。

黒人が「アングル・アルバート」で食事をするにはできなかったが、もちろん台所で働くのは黒人だった。けれども、黒人たちは土曜の夜になるとどこからともなく集まってきては、アングル・アルバートを見ながら、人形がどれほど実物にそっくりかを話していた。アルバート・ポーターを憶えているのは年寄りばかりで、実際の視力よりも記憶の方が強くなっている連中だった。それでもアルバートのそっ

くりさんが毎日見られることにある種の満足を感じていた。アルバートが生きていた頃なら決してやらなかった、そんな笑いを人形の顔が浮かべていても、多分思い違いなんだ、弱くなった目のせいだ、と思った。

年寄りたちは、身代りの有名人気分を味わわせてくれたことで、この店を経営する金持の男に感謝の気持さえ抱いた。アングル・アルバートがお盆片手に今にも駆けだしそうな姿で立っている、ぴかぴかのウィンドウの前を通るたびに、黒んぼは正面玄関から入っちゃいけないけれど、あのアルバートが中にいるんだ、それをおおいに喜んでるんだ、と思うことができたからだ。

エリシアが気になったのは、アングル・アルバートの指の爪だった。制作者はいつかどうやって人形に爪をつけたのだろう。照明があたりときらき

ら光って見える白髪も不思議だった。
ある夏、彼女はレストランの台所でサ
ラダ・ガールとして働いた。その時だ
った。彼女はアンクル・アルバートの
本当の姿を知ったのだ。それは人形で
はなかった。剥製だった。鳥のように、
オオノシカの頭のように、剥製にさ
れていたのだ。

ある夜、閉店後誰かが店に押し入っ
てアンクル・アルバートを盗み出した。
やったのはエリシアとその友達だった。
同じクラスの男の子たちで、エリシア
を「シア」と呼んでいる連中だ。彼ら
はサンダーバードを買って、エリシア
と共有していた。エリシアはジョーク
で男の子たちを笑わせてばかりいたの
で、彼女が魅力的な女の子だといふこ
とをみんなが思い出す暇がなかった。
ハイスールのゴミ焼却炉で、注意深
くアンクル・アルバートを焼いてから、
みんなで各々灰を壺に入れて持ってい

ることにした。一人ひとりにとって、
かかえこんだ秘密とそれに対する反発
は測り知れないものがあった。

この経験は、エリシアがそれまで確
信してきたものを根底からくつがえし
た。彼女は、寡黙で用心深くなり、ち
よっとした物音にもびくびくするよう
になった。どんな町へ行っても、博物
館は恐ろしかった。いたるところにイ
ンディアンの遺体があったからだ。見
ることが恐ろしかった。博物館に陳列
されたインディアンの子供や女たちの
いくつかは本物だった。剥製にされ、
彩色され、かつらを頭にのせられ、衣
装を着せられた人たち。まるで「モル
グ街」に出てくる人物のような。実際、
全部盗み出して燃やしてしまうには途
方もない数だった。それに、立派なガ
ラスの眼をはめこまれたこれらの人物
たち自身が、本当に燃やして欲しいと
願っているかどうか、彼女には確信が

もてなかった。


アンクル・アルバートの場合は、わ
かっているわ、と感じることができた。

アンクル・アルバートはいいたいど
んな人だったのだろう。

そうさねえ。年寄りたちは言った。

誰かのおじさんってわけじゃないのさ。
誰かにそう呼ばれたいと思っただけ
でもなかったなあ。

でもさ。とうとうひとりの年寄りは言
った。俺は憶えてるけど、通りの端っ
こにあるポストの上にあいつらが男の
子の陰部を吊るしたときにな、黒人が
みんな買物する場所だってわかって、
おどしのためにやったのさ、わかるだ
ろ。そんな時に、そいつを引きおろして
土ん中に埋めたのはアルバート・ポー
ターひとりだったよ。でも俺たちそ
の男の子の残りの体はみつけたあ
できなかったな。いつもそんな具合だ



IN
SEARCH
OF OUR
MOTHERS
GARDENS
Womanist
Prose by
ALICE
WALKER

IN SEARCH OF OUR

ALICE

BY
COURT
ICE
OVICH

ったんだ。あいつら、誰かれなく、でかくて太い生木を俺たちの体にくくりつけて、川の中に放りこんで、川底に沈ませるなんざわけねえってことだ。

彼は話し続けた。

アルバートは奴隷として生まれたんだ。あいつが言ってたけど、あいつのお父っつあんやおっ母さんは、奴隷制度が十年も昔に廃止されてたのに、そのことをこれっぽっちも知らされなかったのさ。ボスが法律のこととか全然教えなかったんだ。わかるだろ。だからあいつがそれを知ったときは怒り狂ったさ。やつらにはあいつをこっぴどくぶんなくった。昔のことは忘れろ、ニカッと笑って黒んぼらしくふるまえって言っさ。(誰かが黒んぼみたいにふるまってるのを見ると、アルバートはいつだって、やつは自分の昔のことを心底忘れちまったんだ)って怒ったものよ。)でもあいつは忘れやしな

かった。でかい屋敷の召使い頭だったけど、二度と働こうとしなかった。いつも物をぶっこわしてた。そんときのご主人ってのがいつもやつをひどい目にあわせてた。アルバートを他の何よりも嫌ってたな。だけどあいつをどっか他所で働かせたりは絶対にしなかった。それにアルバートも家から出てゆこうなんて思わなかったさ。金輪際。金輪際、いやだね。俺の土地だから。ともうひとりの年寄りが言った。だからあのアルバートのそっくり人形があんぐり口開けてるってのが解せねえなあ。あの歯並びさ。冗談じゃないぜ。アルバートの歯はよ、やつが一人前になる前、とうの昔に全部へし折られちまったんだからな。

エリシアは大学に進んだ。彼女の友達はみな軍隊に入った。お金が無かったから。物事はたいいていこんな風だ。

彼らは、世界中いたるところにアンクル・アルバートを発見した。エリシアは特に、自分の学んでいる教科書の中に、新聞やテレビの中に、アンクル・アルバートたちを発見して心が傷んだ。彼女がみわたす所すべてにアンクル・アルバート(そして言うまでもなく多くのアーント・アルバート)がいた。けれど彼女は、あの灰の入った罐に、年寄りたちが語った言葉を書き込んで、いつも持ち歩いた。そして友人たちは軍隊から手紙をよこした。ショーウィンドウの板ガラスの中身なんかより、もっとごっそりいただく上手い方法を目下学んでいるところだ、と。

そして彼女は、どんなに誇大な宣伝がふりまかれようとも、自分の心がアンクル・アルバートのような存在を許してしまふことが決してないようしよう、と心に誓った。

キリコのページ

どうして彼女がいじめられることになったのか、一体いつ頃からいじめられていたのか、よくわからない。気がついてみると、私たちは何となく彼女をいじめていた。

(彼女の母親は継母である)

(彼女は病気のために教室で粗相してしまったことがある(という噂である))

(彼女は盗癖がある(という噂である))
(彼女は子供には不似合いな額の大金を持っていて。しかも、それを土の中に埋めて隠している。(これは事実。私がこの目でしっかりと見たのだから))

私たちは当時、小学生だった。

クラス内で、この「いじめ」が問題になるたびに、皆、前述のものを彼女が「いじめられる」理由に当てて、納

得していた。私たちは、それらを理由にすることによって、「だから、自分たちが彼女をいじめるのは当然の流れなのだ」と思ったがっていた。

しかし、今考えてみると、これらの理由の後に「いじめ」が来たわけではなく、いじめた後にこれらの噂を聞く場合もあったのだから、これらはむしろ理由というより口実に近かったのかもしれない。

複雑な環境に彼女は在る。

その不安定な精神が体に及ぼす影響は大きく、彼女は教室でおもらしをしてしまう。

そのため、「汚い」と皆にいじめられることになる。

いじめられたくないと思う彼女は、お金を使い、物で友だちの心をつなぎとめようとする。

だが、小学生のこずかいには限度が

玖保キリコ

あるので、ついつい人のお金に手を出してしまふ。

それが噂になって、また、いじめられる。

さらに「物で友だちを得ようとする子」ということでいじめられる。

私たちが主張した理由から、以上のような物語を組み立てることができ、これはあくまでも物語であって、本当のところは、わからない。

当時小学生であった私たちは、それほどはっきりした理由で彼女をいじめていたわけではなかった。

なんとなく。

これ以上びったりと当てはまる言葉は他に見つからない。

ただ、「なんとなく」という感覚で人をいじめるのは良くないことだとい

う意識が、多少なりとも小学生の私たちにあったので、無理矢理に理由をくっつけたにすぎなかったのだ。

子供は無意識に残酷なのだ。

しかし、前向きではある。

一応は「いじめは良くない」と思っている、彼女が女の子たちに仲間はずれにされたり、男の子たちにいやがらせをされたりすると、私たちは学級会を開いて対策を考えるのであった。「みんな反省して、丁子さんと仲良くしてあげなくてはいけないと思います」と発言しては他の人に、

「そんなこと言うお前だって、いじめたじゃないかよ」と反発される調子のいい子もいた。

この調子のいい奴とは、私のことである。

しかし、その時点では、私は自分が調子がいいという意識は全くなく、

【確かに私は彼女をいじめたことがあ

るという事実を認める】

【だが、それは過去のことであり、現時点では、私は反省している】

【だから、こうして、皆、これからどうしたらいいのか、意見を述べているのであり、今必要なのは、まさにそのことなのだ】
という理由を自信満々に皆に説明しまくった。

皆は納得し、「彼女を仲間に入れてあげよう」ということに決まった。

しばらくは、皆、正義感に燃えて、彼女に対して公平にふるまおうとする期間が続く。

しかし、そのうち、気がついてみるとやっぱり、彼女はいじめられているのだ。

私たちは彼女をいじめ、いじめては反省し、しばらくするとまたいじめて

しまふという繰り返しを何回も経て、小学校を終えた。

彼女は繰り返し、いじめられてはいたが、常にいじめられている状態が続きっぱなしだったわけではなく、仲間として認められ、友だちと遊ぶ幸せな時もあった。

最近、新聞等で「いじめ」が大きく取り扱われることが、しばしばである。私はほとんどそれらを読んでいないので、現在のいじめの状況がわからないし、昔と今のいじめの度合いの違いを比較することもできないが、そういったことを考えると、彼女はそれほどひどいいじめられっ子ではなかったのかもしれない。

彼女は登校拒否もしなかったし、自殺もしなかった。

私は時折、丁子といういじめられっ子の存在を思い出すだけで、たいした悔恨の情も湧かなかった。そんなこと

はどうでもいいことであったのだ。

あのクラスの彼女以外の人間にとっ

ては、
彼女がどんな人間に成長しているか
考える人など、ほとんどいなかったはずだ。

彼女はどんな大人になったか。

あのクラスの間でそれを知る者はいない。

彼女は殺されてしまったのだ。

別れ話のもつれから、男友だちに殺され、海岸沿いの松林に埋められていたという彼女の記事を新聞で読んだその時から、彼女の存在は私の中で忘れられないものとなってしまった。

小学校を卒業して以来、何の音沙汰もなかった彼女の消息が、約十年ぶりに、しかも三面記事となって突然私の前に現れたのだ。

このニュースは、たちまちのうちに皆に広まった。誰も多くを語りたがらなかった。一応、話題にはなったが、ある種の気まずさ、後ろめたさを皆、感じていたに違いない。

「やっぱり、みじめな奴って、最後までみじめなんだよな」という、元クラスメートの一人の冗談

ともつかぬ言葉に、私はうなづくこともできなければ、反発することもできなかった。

私には、彼女の死が悲しかったのかどうか、よくわからない。大きなショックであったことは確かであるが。

とにかく、私にとっての彼女は、いじめられっ子のままで死んでしまったのだ。そして、彼女の存在を忘れることは彼女の死によって、許されなくなってしまう。

彼女をいじめたという事実がある私には、そう思われるのである。

三菱南大夕張炭鉱事故 二階堂泰

五月十七日午後四時、夕張のヤマに衝撃が走り、父を、息子を、夫を奪われた慟哭が炭住街をおおった。六十二人の死者、二十四人の重軽傷者を出した三菱南大夕張のガス爆発事故は、炭都・夕張を再び悲痛のどん底におとし入れた。

「バーン」という音とともに突風が吹きつけ坑内帽が飛ばされた——事故当時、切り羽に自力で脱出した工藤政光さん(54)は、その瞬間を坑口でこう語った。汗にまみれ粉じんで真っ黒な顔。九死に一生を得た目が異様に

光る。

南大夕張炭鉱病院に収容された熊谷建夫さん(31)は「爆風で倒されたが火は見えなかった。そばに父の久(56)と弟の靖信(18)、それにもう一人がいたが、父が『大丈夫か』と私に声をかけてくれたのが聞こえた。もう一人も爆風でうずくまり、動かなくなった」父は助かったが、弟は死亡した。

ガス量が多く、岩盤が弱い——重大災害の危険と背中あわせのなかで、三菱南大夕張鉱は、閉山した北炭夕張新鉱とともに、わが国屈指の超優良炭鉱の評価を受けてきた。しかし、同鉱も海面下六百〜七百メートルにまで深部探炭が進み、ガス抜きなど坑内保安がいちだんと難しくなっていた。その一方で兄弟鉱の長崎県、高島炭鉱の赤字補てん。

「ガス抜きのボーリングを行う際、経費を安くするため、たとえば六十メー

トル掘らなければならないのに、下請けに対する指示で三十メートルでやめることがある。経費を安くするためだ」と同鉱の掘削作業員Aさん(49)は証言する。

また、Bさん(48)は、「携帯用の自動警報器は坑内で頻りに鳴っている。保安責任者は『鳴れば鳴るほどいい炭が採れる』と言って作業を続けさせる」と語った。三菱南大夕張鉱の名ばかりの保安体制を告発する現場の声は大きい。

今回の事故も含め、この六年間に夕張では三つの大事故が起き、合わせて百七十二人が犠牲になった。一九六〇(昭和三十五)年には二十二炭鉱、人口十万七千九百人だった夕張市は、石炭産業の衰退で七月末現在の炭鉱は二つ、人口三万二千人と最盛期の三割にまで落ち込んだ。

大惨事から一週間後、夕張市南部の

谷あいに深い悲しみ色のサイレンが鳴り響いた。六十二人の殉職者合同葬儀は同市鹿島小学校体育館で、しめやかにとり行われた。

読経と線香の匂い、そしてむせび泣き。父の死を理解できない子どもが、遺族席から母の制止を振り切って、会場の外に駆けぬけていった。

十七人の児童が父親を亡くした夕張市立南部小学校では、池田喜代和校長と児童代表二十人が出席。「大事なお友だちのお父さんが死んじゃった。私のお父さんも炭鉱で働いているけど、私(お父さんに炭鉱を)もうやめてと言っちゃった」と、五年生のA子ちゃん。

夫を失った妻のひとりには、ぐずる赤ちゃんを抱きながら、「この事故は人災です。夫はよく『ガス警報器が鳴ってうるさくて仕事ならんヨ』と話していました。なんてひどい会社なの」

と涙ぐんで語った。

二度とあってはならない光景だった。四年前の九十三人が犠牲になった北炭夕張新鉱の事故。合同葬での遺影の表情、白菊の華やかさ、遺族の目。みんな同じだ。

南大夕張鉱と夕張新鉱は、海拔数百メートルの地点で炭層が結びついている。違うのは、あのととき真っ白だった夕張岳がわずかに残雪を残す夏の姿になってることだけではないか。

一九六九(昭和四十四)年に出炭を開始した三菱南大夕張鉱は最新鋭設備をそなえ、保安対策では「日本一」の折り紙をつけられていた。十五年も前にガス検知器を主要坑道にめぐらし、地上の管制室で監視するシステムを完備した。

ヤマの男たちは、口をそろえて言う。「ヤマのなかに入ってみな。そうすりゃわかるさ」地上の近代化と、坑道深

部の前近代性のギャップを知るのは現場の労働者たちだけだ。盤ぶくれ。という言葉がある。坑道の下部が盤圧で盛りあがってくる現象を指す。夕張新鉱ではあたりまえのことだった。だが、これが起きると探炭はストップ。まず、自らの仕事場を確保するために盛りあがり部分を削る作業を徹底しなければならぬ。

その時、地上の管制室は指令する。「出炭目標を忘れるな。早急に探炭の仕事にかかれ」と。

「夕張 喰うばり 坂ばかり いっぱつ どんとくりゃ 死ぬばかり」——夕張のマチでは子どもでも知っている悲しいザレ歌である。大きな炭鉱事故が起きるたびに、命を断られた男たちを悼むとともに、ヤマの町の悲哀を込めて人の口にのぼる。この歌が聞こえなくなるのは、炭鉱が消滅する日でなければならぬのか。

工房訪問②

スタジオ・アヌー

インタビュー

という仕事

去年の春、新宿の酒場で江崎さんと飲んでいて、突然、子供の聞き書きをあつめた大きな本をつくらうという話になった。

その前年、私はスタッツ・ターケルの「仕事！」という本をだした。そのあと、おなじような私たちの大きなインタビュー集を、なんとか自分たちの手でつくれないものかと考えていたのだ。子供の聞き書き集をつくりたいと思ってるの、という江崎さんの話をきいて、反射的に、だったら一緒にやろうよと口走ってしまったのだ。

本のかたちのプランと中身のプランとが、うまく一致した。めったにないことだった。

それから一年、江崎さんが属している「アヌー」という企画編集グループと力をあわせて、ようやく「子供！」という超特大本をつくることができた。あまりに大きすぎて、まさきき自分

小形桜子 江崎泰子

たちが度胆をぬかれた。じつは、いまもまだ呆然としているのだが……。

津野「集英社からでた「モア・リポート」が、アヌーの最初の大きい仕事だったよね。そのあとが「女の子と男の子の本」全五巻。ぼぶら社ね。それからこんどの晶文社刊「子供！」——どれもでっかい、しかも個人の筆者じゃなくて、不特定多数の人たちの発言をあつめた本が多いんだね。個人より集団というか……」

江崎「そういうところに個人を見つけてるのが好きなのね」

津野「そりゃそうだ。なにも統計をつくるわけじゃないんだから」

江崎「はじめの「モア・リポート」にしても、どれだけその人の個人的なセクシュアリティをつたえることができるか、その上で、これだけいろんな人がいるんだということを打ちだしたか

ったんですね」

小形「女とか主婦とか子供とか、そういう巨大な化物がどこかにいるみたいだけど、そんなことはなくて、そこには一人ひとりの人間がいるにすぎない人間はただの概念じゃないんだということをお願いして、そういうところかもしれないね」

江崎「うん、そうだと思う」

アヌーの事務所は、駿河台下の小さなビルの五階にある。一階はゲーム・センター。エレベーターがないから、せまい階段をてくてく上っていく。汗が吹きだす。ドアをあけると、けっこう広い部屋だ。メンバーは五人。女性ばかり。本棚には女性関係の本がびっしり並んでいて、私など、はじめのうちはやや緊張した。

いつ行っても、数人の女性が熱心にデスク・ワークをしている。定期的な

仕事としては、「モア」や「LEE」や「バーソナル」など、女性誌の記事がおおい。暑い。小形さんと江崎さんをさそって、ちかくの山の上ホテルのロビーに避難して、そこで話をきくことにした。

江崎「このあいだ高平哲郎さんと対談したんです」

津野「うん。「子供！」についてどう？」

江崎「そのとき、テープがぜんぜん入っていなかったのね」

津野「へえ」

江崎「記憶にたよって書いてみましたので赤入れしてくださいって、原稿が五ページ分ぐらい送ってきた」

津野「そういうこと、よくあるんだよ。ほくも二、三度やったことがある」

江崎「でも、意外におぼえてるんですよ」

津野「うん、直後ならね、まあ再現できる。そういえば高平はさ、あいつインタビューの本をたくさんだしているけど、ぜんぜんテープはつかわないんだよ。特徴的な語尾みたいなのだけメモしておいて、その晩か翌日に原稿にしゃうんだって。あいつは特別うまいけどね、でも、そのつもりでやれば、だれでもできるんじゃないの？」

江崎「とりあえずテープもとっておくけど、という感じのほうがいいみたい。小形さんだってそうだもんね」

小形「うん。だって昔はテープがなかったんだもん。だから……」

江崎「ええっ、小形さんが仕事をはじめたころ、まだなかったの？」

小形「うんと大きなものしかなかったから、メモをとるしかなかったの。それでも、けっこう長いもの書いてたんだから」

津野「仕事はじめて、どのくらい？」

小形「二十年くらい」

津野「おれも二十年以上やってるもんね。もう二十五年ちかい。だから、そういうもんなんだよ。座談会とか、三人以上になっちゃうとつらいけど、そうじゃなければテープなんてないほうがいい。鎌田慧も取材はメモだけで、いっさいテープはつかわないっていったな」

江崎「高平さんは相手の話を聞きながら、かなり自分のこともしゃべるみたいなね。このあいだは対談だったからもちろんだけど、ふだんのインタビューのときでも自分のことをバツとしゃべっちゃうんですって。そしたら相手がショーケンのときだったかな、オレの話を聞きにきたのになんだって、すごく怒りだしてケンカになっちゃったんだって」

津野「ハッハッハ。ところでアヌーの人たちはどんなふうやってるの？」

津野「そうね。新聞記者なんていうのは、わりとそういうのが多いんじゃないかな？」

江崎「多いですよ。私、こんどの『子供！』のことで、ずいぶんインタビューをうけたでしょ？」

津野「どのくらいやった？」

江崎「十いくつ」

津野「そりゃすごいや」

江崎「勉強になったし、それはすごくおもしろかったわけ。なるほど、ほかの人たちはこういうふうインタビューするのかわって、いい反省材料になった。それで、しばらく話していると、あ、こういうパターンでいこうって決めてきてるなってわかる時があるのね。やっぱりそれは新聞記者に多いタイプ。私がないを話すかよりも、あらかじめ向うが用意してきた話の流れがあって、それに当てはめよう当てはめようとするのね」

津野「じゃあ、いいインタビューっていうのはどういうのだった？ 質問される側から見ると……」

江崎「時間的な余裕がないとむりなんだけど、たとえばインタビューにきた人が、じつは私も子供がいるんですけどねなんていうふうになると、ぜんぜんちがうもんね。その個人と向いあっているという感じがないと、もう一つね、こっちも通りいっぺんになっちゃうの。個人対個人の話になると、それに刺激されて、まえにはしなかったような話が自然にでてくる。結果的に見ても、そういうインタビューのほうが絶対にうまいと思うし……。だからタケルなんか、『仕事！』のときでもなんでも、自分のことを相当しゃべってるんじゃないかしら」

津野「あの人はいもう七十五歳か。年へたオロチだから、しゃべることがいっぱいあるもんなあ」

やっぱりインタビューが仕事のかなりの部分を占めてるわけでしょう？」

小形「そうですね。最終的にインタビュー記事のかわりにならなくても、取材して、それをまとめていく場合が多いから、人に会って話を聞くというのがメインの仕事ですよ」

津野「ぼくだってそうなんだけど、これは好きじゃないとできないようなところがあるよね」

小形「いまの高平さんみたいに、自分を出すっていうことは一つのテクニクだし、エチケットだと思わなければならない。相手がどういう人かわからないのに、どのくらい自分を出せばいいのかわからないこともあるけど、ある程度、おたがいが自分を出してやったものじゃないと、つまらないですね。はじめから聞きたいことを決めておいて、それを確認しただけで帰ってくるみたいなのは」

江崎「そうそう」

津野「なにも、おおぜいの匿名の人にむかってしゃべるわけじゃないんだもんね。いま眼のまえに坐ってる特定の人物にむかってしゃべるんだし、相手が変わればしゃべり方だってちがってくるし……」

江崎「子供のインタビューのときだって、私、かなり自分のことをしゃべった。自分の子供時代のこととか、いま結婚しないで一人にいるのよとか。子供たち、まわりにそういう大人がいないでしょう。だから、ええっ、ホントに結婚してないの？ どうやって暮らしてるのって、すごく興味をもたれたりしてね」

津野「アッハッハッハ、じゃあ、つきは子供が大人にインタビューして、でっかい本をつくるっていうのもおもしろいかもしいないな。『大人！』なんていっちゃってさ」

小形「もう一度インタビューしてくれませんか。いってこくる人もいるわね。もっと話したいことがあったのに気づいたからって。そういうのは、かならずいいインタビューになる」

津野「なるほどね。それにしてもさ、インタビューっていうのは、どこがおもしろいのかな？ テーマを決めて原稿をたのむのと、どこがちがうんだらう？」

江崎「原稿は向うからの一方的な表現だけど、インタビューはライブでしよう。質問する側と答える側とのセッションだから、なにがでてくるのかわからない。とくに子供の場合、いちばんそれがあったんだけど、雑誌で主婦にインタビューしても、へえ、この人がこんなことを考えてるのかとびっくりするようなことがあって、私なんかそこがおもしろいのね。みんな一人ひとりの世界があるんだなと、なまで感

ジツマを合わせた私たちの人は、強引にそうしちゃうじゃない？ だけど人間の会話というのは、底のほうで話がつながってても、表面はバランションという場合のほうをはるかに多いよね。だったら笑ったり口ごもったりする調子を活かして、その底のところでのつながりのほうを浮かびあがらせてみないとかき、その人間の質とか好みとか、いやおうなしにでてきちゃう」

江崎「自分そのものなのよね、できてきた原稿っていうのは」

小形「ほんとよね」

江崎「こんどの『子供！』は、五十人以上のインタビュアーが参加してくれたでしょう。それぞれが、やっぱりあの人らしい原稿だなんて思った。ある人は自分の子供がかよって保育園のことがあるから、子供の批判的な眼が生きてる部分をすごく大事にするし、ホラ、最後に津野さんと旅館にこもっ

じられるおもしろさ」

津野「そうか。インタビューの原稿には、する人とされる人とが二人でつくってるといふ面があるんだね。そこがおもしろいと」

小形「結局ね、私、相手と自分との差を確認するためにやってるんじゃないかな。なにを話してるかという、自分とその人の差を話してる」

津野「インタビューをやったあとで、メモでもテープでも、こんどはそれを原稿につくっていく仕事があるでしょう？ そうすると原稿に起こす人によって、おなじ話なのに、ずいぶんちがいがでてくるんだよね」

小形「どこをとって、どこを捨てるか」

津野「うん。どういう口調を活かすとかか、どういう息づかいをきわたせるかとか……それがぼくは好きなのね。ぼくのテープ起こしは、すごくクセがつよいと思う。いまのこの話でもね、

て構成したときも、あっ、これはあの
人だなんて……」

津野「そうそう、すぐわかるよな。この単純な正義感はいつにちがいないぞとか……」

江崎「ハッハッハ。たとえば教育問題に関心をもってる人は、すぐに話をそっちにひっぱろうとするわけよね。あとでベタ起こしの原稿を見せてもらうと、かれが捨てた部分のほうをはるかにおもしろい。それで教育問題なんていう一般的な問題はどうでもいいから、こっちはほうをつかって、なぜその子なのかというところをもっとはっきりだしてよって注文をつけたりとかね。これだけ大量にやると、その人がなににこだわっているのかということがモロにでるのね。ということはずまり、きっと自分もそうなんだろうな」

津野「自分の思いこみで整理しすぎちゃう。そういえば、まえに『世界』で

おんなじタイプをもとにして別の人が原稿にしたたら、ぜんぜん別の雰囲気のものになるんじゃないかな」

小形「いちど私ね、三国連太郎にインタビューしたことがあるの。たまたま男性のインタビュアーといっしょで、どうしても私が仕事でいそがしかったから、その人に記事をまとめてもらったの。そしたらね、私だったら捨てるところをぜんぶ入れて、その人、私が入りたいところをぜんぶ落としちゃったの。これじゃだめだっていうんで、ぜんぶ自分でやりなおした。私は男と女の具体的な話にしぼったんだけど、かれは一般論でまとめようとするのね。そのこと自体が男と女の差なのかもしれないけど、あんなにちがうとは思わなかった」

津野「男と女の差でもあるけど、それは資質のちがいでもあるんだね。インタビューでも座談会でも、論理的にツ

在京沖繩青年たちの座談会の司会をやったことがあるのね。そののゲラを見たときもびっくりしたな。朝日ジャーナルなんかもそういうところあるけど、話の口調とかをぜんぶ消しちゃっうんだよね。……である、とか……ではあるまいか、とか、なんか東大法学部の先生たちが国際問題について論じてるようなさ、きちんとした文章ことばで要約しちゃうわけ。そりゃあ抽象的な問題をとりだしてくるためには適切なかたちなんだろうけど、こっちはそうじゃないでしょ？ 専門的なインテリじゃない連中があつまって談論風発してるだけなんだから。だったら、なまりのつよい、その分いきいきした口調とかき、やりとりの素早さとか、そっちのほうを主眼として起こしていかなければ意味がないはずなんだよね。さすが岩波書店と思っただな」

小形「モンダイなんか、いつも単純で

あきらか……」

江崎「そうそう」

小形「ねえ。それに対して、あいまいさとかニューアンスとか、それこそがその人なんだけど、そこをぜんぶとっちゃうわけよね」

津野「インタビューでも座談会でも、一つの場なんだよ。その場のいきいきした感じを再現できないと、どっかも足りない感じがするな」

小形「むだと思える部分を、どれだけ捨てるかよね」

江崎「でも雑誌の特集なんかやってると、どうしてもむだが入れられないでしょう？ ついついテーマに合わせて必要などだけをピックアップする記事のつくり方になるのね。そのヒトをつたえるんじゃないかと、そのコトをつたえるだけになっちゃう。それで欲求不満になることがありますね」

津野「水牛通信でも、よくインタビュ

もそうだったけど、最低限の話の筋をとおすと、あきらかに子供は話したいと思ってるのに、うまく話せてないところをなんらかの仕方でおぎなったりとか、その段階で、どうしてもある種の演出をしないでならないよね」

江崎「それが心苦しい。でも、できたものを子供に見せてみるとね、みんな自分はどういうふうにしゅべったと思ってるのよね。大人の場合でも、そっくりそのまま書いてもらったと感ずるほうが多いみたい」

津野「それはそう。相手が考えてもいないようなことをつけくわえてしまうわけじゃないんだもん。自分では話したと思っても、それがうまくことばになっていない。その底のこのつながりを表面にひっぱりだして、なんとか相手を魅力的に押し込めようとするわけだもん。それがピタッと合えば、おれはたしかにこういうふうには話したっ

ーや座談会をやるのね。だいたいおれが原稿に起こすんだけど、二十数年来の職業的習慣で、「(笑)」なんて、ついカッコを入れてやっちゃうんだよね。そのゲラを見て、高橋悠治だか八巻美恵だかが、それをいちいち消してやがった。コンチクショウと思っただけどね、基本の起こし方さえ元氣よくやっておけば、たしかに「(笑い)」をけずっても、それはそれで十分につながるわけ。大発見。それで、こんどの「子供！」でも、ほとんどぜんぶとっちゃうんだよね。座談会記事っていうのは実況放送みたいなもんだからさ、たしかに「(笑)」をつかえば楽なんだけど、棄すぎるっていう気がしないでもないよね」

小形「うん。下手な芝居を見せられてる感じよね」

津野「勝手に笑わされてね。うまうまと演出されちゃってるわけだ」

て、そう思いこむよ」

江崎「こっちはこっちで、あんなに苦労してつなげてあげたのになって、ひそかに思ってたりにして……」

津野「そういえばね、藤本和子にいわせると、ターケルのインタビュー集は、しゃべりことばがすごく画一化されてるんだって。整理されすぎてるっていつてたな」

江崎「あれはインタビューと編集と別々にやってるんでしょ？」

津野「インタビューするのはターケルだけど、起こすのは別の人——女性がやってるって書いてあったね」

江崎「またそれを原稿にするチームがあるんでしょ。だとしたら、よっぱどいいチームじゃないとむりよね。私たちだったら考えられないもの」

津野「なんとんでもターケルは強力なジャーナリストだから、もしかしたら編集の力でもおもしろくしすぎているの

小形「ちょっとさっきの話にもどるんだけど、テーマをもってインタビューしてると、こっちは、なんとか話をそのほうにもっていかうと努力するわけですよ。それなのに相手がニョロリニョロリとそれていくときの、あのいらだたしさね」

江崎「うんうん」

小形「なんだろう、このいらだたしさはって思う。結局、ある種の強姦なよね。なにがなんでも相手をねじふせようとしてくること、気分のわるさ」

津野「それはあるだろうね」

小形「どうしても向うが話したいんだつたら、その方向でやっただけがおもしろくなるにきまってるんですよ。それなのに、みすみすその人をつまらなく見せてしまう。そのことに自分が加担していること、イヤさ、ね」

津野「それはあとで起こしたものを編集するときは同じ。『子供！』の場合

かもしれないね。藤本さんもディーブサウスの黒人女性たちのインタビューをつづけてきてるからね。それで、ちょっと反発するところがあるんでしょ。おれたちの『子供！』は、その中間ぐらいのところかな」

江崎「和子さんのインタビューって、すごくうまいのよね。このあいだ水牛にのってた百何歳のおばあさんのインタビューでも、コックリコックリ居眠りをはじめ沈黙がつづいているところとかね、ことばにならないその場の空気を、なんてうまく表現する人なんだろうって思った」

津野「それは藤本和子という名前をだしてやる時に可能なテクニクなんです。匿名のときはまたちがってくるよ。匿名でそれをやると、ちょっとうるさい感じがするかもしれない」

江崎「そうね。それはそうかもしれないわね」

料理がすべて番外 田川律

七月一日 台風六号の余波をうけて十時間以上遅れたガルダ航空の飛行機がインドネシア、バリ島のデンパサールに着く。朝。少々の自称ガイドに囲まれる。はじめての国で、迎えに来るはずの人が来ていないと、いささか慌てるが、ニューヨークのラ・ガールディア空港で深夜の二時過ぎに、たったひとり、来るはずの迎えを待っていたり、ジャマイカのキングストン空港で、乗り遅れて、私設エア・タクシーに乗るために、大型バスの「白タク」にたったひとりで乗ったりした体験からすれば、のどかで、ちょっと新潟空港にでも降りた感じ。そういえばふだ

ん気がつかないが、国鉄で地方の駅でおいても、自称「ガイド」というか、客引きはいるものだ。「お泊りは？」「タクシー？」ってヤツ。

バリはこの時期、冬。オーストラリアの冷たい風が吹き込み、海の波は高く、夜はひえるという。つい先日、そのバリのクタ地方にしばらく住むことにきめたキョウコちゃんを訪ねる。かの女は、六歳のユメコと四歳のサスケを連れて、二年ほどここで暮らしてみるのでという。

メナスティ・インというもとコテージだったところを借りている。石のへいに囲まれた木の門をくぐると、広い庭。ハイビスカスをはじめ、たくさん木が茂っている。その庭の両側に、ずらりに部屋が並んでいる。片側四つとして八つ。それ全部を親子三人で借りている！二年で約六十万円。

知らぬ他国では、そこに住む人と仲

良くなって、その人に導かれてその国へ入って行くのが良い、と思っっている。今回はキョウコちゃんを窓口にして、バリの町、人々と、そしてその世界に入ろうときめた。

せめて、お礼に、みなさんに料理でも、と思っ、広い庭を眺めているうちに、これは、パーベキュー・パーティーだ、と考えた。冬、とはいっても常夏の国、日本の六月初旬ぐらいの暑さがある。火なんかおこしたら、さぞや暑かる、と思っしたが、キョウコさんたちの暮らしは、石油コンロで煮たきをする、という自然流だし、鍋、釜、食器なども必要最小限しかない。たくさんの人で、カンタンに、となれば、パーベキューにかぎる。

という話を提案したら、ユメコの踊りの先生である美人のワヤンをとりまく一族が「四十人も来るんだって！」ええい、もうヤケクソ。ちょうど日本

からきていた、キョウコさんの友だちで、ユメコとサスケのオトウサン（そ

れで、なんで友だちなのか。つれ合いか。でも、最近べつべつになったというし。そういう時、友だちというのがいちばん近いのではないかと、ぼくと同行したシショウ（なぜ、シショウか。この人の苗字が玉川。ぼくが田川で、タマガワのマヌケがタガワ。よって玉川さんの方がシショウ、ということになる、とこれは昨年夏のジャマイカ旅行で、知り合った時、これも同行のカメラマン、芳原クンらと一致した意見）と三人で、朝の早よから、ベモに乗って、クタからデンパサールの朝市へ買い出しに出かけた。

ベモは、ファイリピンのジブニーのおとなしいヤツ。公共乗り合いバス、とでもいえばいいか。バス、といっても大きさは二トン車か、ワゴン。これがまたジブニーと同じで、料金がきまっ

てるような、ないような。それと、つめ込むわ、つめ込むわ。

こんな乗物は、日本になかった。もしあったとしたら、渡し船。「まあ、飲みねえ」と森の石松に出てくるヤツ。駅もなければ、車掌もない——時々添乗して人があるが——土地の人の料金と、外国人の料金が違う。しかし、ジブニーにしろ、ベモにしろ、これほどなにやら親密感を味わえる乗物も少ない。「袖すり合う」どころか、ギョウギョウに詰め合って坐るし、ちよと揺れると鼻と鼻がごっつんこしそう。

朝市。これがまあなかなかのもの。常設市場のすぐ傍の野天に、野菜を中心にひろがっている。あの喧騒がいい。そのうえ、ぼくらには「ガイド」志願がしつかりつきたがる。ジュンタ、なまじインドネシア語をはなせるので、ついついカワイイ女のこふたり！の

「ガイド」を頼んだ。小柄なコだけど十七とか。あれ買いたい、というのと、たちまち喧騒をかきわけ進み、くだんの店の前では、オバちゃん相手にしつかり植切ってくれるし、魚なんかは、どれが新しいか、果物はどれがうれているか、吟味してくれる。

いっちゃん、難儀したのは炭。この時、もう「学生アルバイト」のふたりのコはいなくなっていた。トリ、ブタ、魚、野菜、をかかえて、市場の周辺の荒物屋あたりをウロウロ。屋台でサテという焼鳥の一種をやっているんだからそれに使う炭はあるはず。とジュンタとカクシンして探したが、それが無い。サテで使う、という、細長い器を教えてくれたり、スミというのが、こんなに見つからんものか、とびっくり。最後に白髪のおバアサンのやっている店で見つかったメデタシ。さて、パーベキューの方は、次号でたっぷり——。

ハイウェイを走る車窓のむこうに、テキサスの油井のヤグラがつづいている。夕陽をうけたその風景は、荒涼としていてもの哀しい。別れた夫が引取った三人の子どもと面会しての帰りに、カレンが眺める風景である。

「シルクウッド」は「誰がカレンを殺したか」としてよく知られるようになった、原子力殺人事件の映画化である。もともと原発などはウサン臭い存在で、奇計、カネのバラまき、情報操作など、日本でも人心荒廃の極みではない。という小生も、福島第一原発ではたらく労働者の妻が、小頭児を死産した、との噂をたどって病院を駆けめぐり、結論をえなかつた。白血病、ガンの発生なども、多発している、といわれながらも、その因果関係の証明

は難しい。

カレン・シルクウッドがはたらいっているのは、カーマギー社のプルトニウム工場である。カーマギー社は、石油採掘から出発して、石炭、ウラン採掘まで手をひろげた一大コングロマリットで、創立者のカーは、オクラホマ知事から上院議員にまでのしあがっている。

日本の原発はある種の警戒地帯だが、この世界的企業のオクラホマ工場は、あきれるほどに安全管理がズサンだ。ちいさな駐車場からつくづくドアを押すと、もう工場の内部で、ここで原爆の原料にもなるプルトニウムのペレット(ダンゴ)がつくられている。

カレンの仕事は、減圧された大きなガラスケースの中に伸びていく長いゴム手袋に手を突っこんで、プルトニウムと酸化ウランを混合させることらしい。両手をゴム手袋の中に突っこん

でしまっているの、口の中のガムを取り出そうとしても取り出せず、ポイフレンドに取ってもらったり、仲間や飯を勝手につまんだり、無邪気でいささがさつなテキサス娘をメリル・ストリープが演じている。この間みればかりの「ある上院議員の私生活」では、大実業家婦人にして、きわめて有能なる弁護士だった彼女の「転落」の速さには眼をみはるしかない。彼女は、はじめて乗った飛行機で、飲物をはこんできたエア・ホステスに「いくらですか」とたずねるほどに田舎娘として描かれている。

といっても、監督のマイク・ニコルズは、けっして彼女をバカにしているのではなく、やはり田舎娘のひとりにはすぎなかったジャンヌ・ダークになぞらえているようにみえることもある。無知な娘が、同僚の被爆と本人自信のたびかさなる被爆、そして欠陥ペレ

ットのX線写真を修整する技師を目撃したりすることによって、安全管理をもとめる労組の活動家となり、内部告発の決意を固める。それにしても、アメリカ原子力労働者の意識の低さは絶望的でさえある。工場の通路で、休憩時間に誕生パーティーをひらき、床に落ちたケーキを拾って食べたりする。それで想い出したのだが、「アトミック・カフェ」だったか、その映画に収録されていたペンタゴン作成の原爆キヤンペーンのフィルムではピカドンとくれば、教室のつくえの下にもぐれ、とか、道路ぎわに伏せろ、などと教育していたのだった。原爆や水爆を所有している国の国民が、原子力の威力や恐怖をよく知らされていないのは、おそらく「平和のため」に役立つとの信仰が尾を引いているからであろう。会社側の切り崩しによって、少数派になつてしまつた労組の執行委員として、

カレンは猛然とがんばりだし、おなじ職場ではたらいっているポイフレンドさえへキエキするようになる。それでも構わず、彼女は会社側の不正のデータを収集しはじめ。労働者の安全のために活動しているのだが、仲間からは支持されず、批難されるだけ。もしも、会社の不正が社会問題化して、工場が閉鎖されることになったら、おれたちはまた失業してしまふんだぜ。日本の公害企業の労働者とおなじ反応である。「明日の生命より今日のメシ」ノ近代労働者も前近代的な炭鉱労働者とおなじ二律背反の十字架を背負っている。

内部告発の資料をカバンにつめて、カレンは白塗のホンダシビックを走らせる。目的地には、「ニューヨーク・タイムズ」の記者が待っている。と、うしろから、巨大なヘッドライトがせまってくる。やがて、ハイウェイの下に

突っ込んだ彼女のクルマの残骸と彼女の遺体が発見される。

映画はここで終わるのだが、カレンが動き出すのは、それからである。「誰がカレンを殺したか」は、反原発運動のひとつのスローガンとなる。遺族が訴えた裁判は、「安全義務違反」として勝訴となり、損害賠償金の支払いは決定した。が、誰が殺したか、については、まだ明らかにされていない。

映画では、作業中にプルトニウムによって汚染された労働者が、裸にされ、タワシでこすられるシーンが何度か出てくる。それ以外に放射能を除去する方法はない。カレンの部屋は、誰かがもちこんだプルトニウムによって、完全に汚染されている。プルトニウム社会の恐怖である。CIAやFBIも暗躍していたらしい。カレンの告発は、アメリカ原子力産業にとって、けっして許すことのできない行為だった。

ひさしぶりに黒テントの仕事を手つ
 だった。この夏、俳優座劇場で上演す
 る『今宵プレヒト仰天レビュー』の稽
 古に大わらわで、だれもパンフレット
 のつくり手がいなくなってしまうた。
 それで、やむなく私がその任務をひき
 上げたのだ。

インタビューや座談会をテープにと
 り、それをワープロで文字起こして
 版下をつくる。オーラルなものと文字
 的なものとのあいだで、いったりきた
 りするのはきらいな作業ではないから、
 それなりにたのしんだ。すべての作業

を一週間でやりおえた。たぶん水牛通
 信の経験が役にたったのだろう。

おかげで芝居を見に行くことができ
 なかった。水牛通信の原稿もおくれに
 おくれた。

朝十時半になると、かならず電話を
 かけてきて、冷たい声音で原稿を催促
 する高橋悠治とのかけひきが、私にと
 って、今月唯一の演劇的時間であっ
 た。せっかく時評をはじめたばかりな
 のに情けない。当初の予定では、粉川
 哲夫が横浜で演じるエレクトロニック
 ・パフォーマンスを見にいった、堂々
 の論陣をはるつもりだったのに。来月
 から書評かなにかに担当を変えてくだ
 さい。

先月号でふれた世仁下乃一座の「わ
 ん・はうす、わん・ゆにおん」——私
 はあまりおもしろくなかったと書いた
 けど、山元清多はたいへんおもしろか

ったそうだ。

かれはフィリピンの若い劇作家夫婦
 といっしょに見にいったのだが、世仁
 下乃一座の方法がドラトラというフィ
 リピンの即興劇の方法にあまりにもそ
 くりなのに、みんなでおどろいたとい
 う。あの人たちはドラトラなんて知ら
 ないんだからさ、と山元はいった。偶
 然の一致なんだけど、だからこそおも
 しろかった。おなじことを別々のとこ
 でやっている。ということは、きつと、
 その底に共通したものがあるからなん
 だろうね。

ビンボン玉の付け鼻その他、「力ま
 かせのアチャラカ芝居」と私は書いた。
 山元にいわせると、あの付け鼻は南ア
 フリカの民衆演劇運動の発明品で、そ
 れが黒テントにつたわり、さらに世仁
 下乃一座につたわっていったものなの
 だそうだ。これは偶然の一致ではなく、
 意図的な模倣。いや、引用。

なるほどね。おれはあの舞台の見方
 をまちがったのかも知れない。芝居に
 見方なんてあるもんかという立場にた
 いして、あるというのが私の立場だ。

私の想像力は、あまりおもしろくな
 った舞台をささえるひろがりのおもし
 るさにまでは、とどかなかった。もう
 いちど見てみたいと思ったが、すでに
 公演は終わっていた。

イタリヤから手紙がきた。中村江美
 という署名がある。思いだした。数年
 まえ、南イタリヤのタラントという町
 にわたっていった若い女性だ。

彼女にはイタリヤの人形劇にほれこ
 み、その巡業劇団を追いかけて、イタ
 リヤ各地を歩きまわっていた時期があ
 る。タラントに行ったのは、日本資本
 との合弁製鉄工場で通訳としてはたら
 いたためだが、そのほかに、もちろん本
 格的に人形劇の勉強をしたいという目

的があった。本当にひさしぶりだね。

なんとか目的は達成したのかしらと手
 紙の封を切った。

南イタリヤというのは、ほとんど東
 南アジアみたいなおもしろい。農業
 と漁業しかない土地に、イタリヤ政府
 が押しすすめている南部開発計画の一
 環として、巨大な製鉄工場が建設され
 た。そこに例によって日本資本が進出
 していく。突然の近代化。鋼鉄の時代
 のはじまり。

「古い家も古い家具も——と住民のひ
 とりが語る——あのころのものはなに
 もかも捨ててしまいました。だれしも
 苦しいときの思い出をよびさますのは
 つらいことですからね。でも、そのこ
 とがどうい結果を生みだすかなんて、
 まったく考えもしなかった」

そうした状態で通訳の仕事をするこ
 とに、彼女はわりきれない気持をもち
 つづけていたらしい。偶然、近くの町

で古い素焼の仮面をみつける。文化的
 伝統などないといわれてきたこ
 の地方に、紀元前の大昔、じつはギリ
 シャの影響をうけたイタリヤ最古の仮
 面劇が存在していたらしい。いま彼女
 は、その失われた仮面劇のあとをたど
 る作業にのめりこんでいる。

あたらしい変化のなかで、ながいあ
 いだ忘れられていたものが不意によみ
 がえってきた。彼女は、その動きのま
 っただなか身をおいている自分に気づ
 いた。

やがて彼女は日本にもどってくる。
 この国の演劇世界に、彼女の経験をう
 まく生かす道はあるのだろうか。私は
 悲観的だ。それはそうなんだけど、で
 も、アカデミックな研究者になろうな
 んてつまらんことは考えずにさ、と返
 事を書く。あなたの経験のなかから、
 とても学者などには書けない、パンチ
 のきいた仮面劇論を書いてくれよ。

●近藤等則とI M Aバンド（六本木ビ
ットイン 7月11日）

レコード「メタル・ボジション」発売記念ライブ。近藤等則の電気トランペット、スピーカー（商店街放送用キ
ット）、シンセ・パーカッション。酒井泰三とレックのギター。富樫春生のシンセサイザー。山本秀夫のパーカッション。難聴レベルのP.A. 最初はトランペットとドラムスしかきこえてこない。それはレコードもおなじだった。ライブでは目に助けられるせいか、耳がなれるにつれて、ほかの楽器もきこえてくる。

やはりトランペット以外は打楽器と

かんがえていいみたい。それぞれの音色が簡潔なアクセントをつけていく。16ビートだがノリはむしろゆっくりしている。こういうところはニューヨークのヒップ・ホップとおなじなのかもしれないが、リズムはアフロ・アメリカというよりはジャワのガムランのようにスタティックにきこえる。アンサンブルのかたちはミンダナオのクリンタンにちかい。メロディーと即興をふくむ数種類のドロロンの同時進行。

トランペットのソロもバンクやフリーの過剰さが消えて抑制された音楽になっているのにその反対の外見をもたせて売ろうとしているような印象。東京ではこうしたポーズが必要なのだろうか。

7月はコンサートにはあまりいかなかった。高橋鮎生と如月小春、近藤達郎、伊東信介のライブにいったが、こ

れははじめから主観的な判断しかできないだろうから書かない。「今日の音楽」でのジェフスキーの日にはいけなくて練習をきいた。マヤコフスキーの「芸術家への指令第二号」につけた朗読と室内楽の曲など。古典的なこのテキスト選択だけではなく、音楽の方もたったひとつの音程（完全5度）から全体を組み立てるプラトニズム、6対5の比でセクシオンごとに加速していくエリオット・カーター流の手法でとのえられている。ヨーロッパに住みついたアメリカ芸術家としてはT・S・エリオットやヘンリー・ジェームスのタイプなのだろうか。

コンサート以上におもしろかったのはともだちと交換でもらったテープだった。いまあたらしい音楽はレコードにまだ（あるいは、決して）ならないミュージシャンの私的カセットのなかにある。

●ホセ・マセダの近作「アロディン」「シアシド」「スリンスリン」。

40本の口琴とか、10本の調子はずれの笛と10本のバリンピンに10個のゴングといったふしぎな組合せで数十分づく音楽。すき間のあいた不正確な音階のなかで音は、ヨーロッパのように点や直線ではなく、インドや朝鮮のように曲線でもなく、にじんだ色の帯になる。どんなにはげしく打ち鳴らしても竹の音は冥想をさそう。それが東南アジアの島の空気にただようなにか、大陸からきた大文明になじまない村のスピリットなのか。

マセダのいう東南アジアの村の音楽は過去ではなく、いつでもつくられつつあるものだ、ということがこれらのカセットから伝わってくる。

●エリオット・シャープ「ライブ・イ

ン東京」（ニューヨークから送られてきたカセット）

今年4月やってきてほとんど知られずに数個所で演奏していったときの録音。カセットでだれかがとったものをマスターングして自分のレーベルですつものらしい。ニューヨークのローワイイストにあつまるミュージシャンは自分たちの音楽を自分たちの場所ですべて自分のレコード会社から出す人がおおい。ポストパンクのスタイルだが、東京でもいざれそうなるだろう。

それぞれが自分のスタイルをもつなかで、シャープのはダブルネックのギターベースと電気バスクラリネットのディストーションのかかった音に倍音唱法による声で、メタリックな音と無機質なリズムに特徴がある。紙には書かなくても、きまった構成があるらしい。倍音列の選択とフィボナッチ級数によるリズムや全体の分割。素材はま

ったくちがうが、セクシオンごとの音楽のタイプの設定のしかたはアラブのマカームをおもいだす。

●ジョン・ゾーン「クラシック・アレ
ンジ集」（これもニューヨークからのカセット・コピー）

クラシックといってもクルト・ワイル、エンニオ・モリコーネ、セロニアス・モンクによるおもしろいがない楽器とノイズのゲーム。まだ作業中のもののサンプル・コピーだが、プレヒトワイルの「救世軍少尉の歌」がとりわけおもしろい。ハーブとアコーディオン、ギターとトロンボーン、日本語とドイツ語のモンタージュ。機能は解体され組みかえられている。

水牛かたより情報

●「エリシア」のアリス・ウォーカーの作品で翻訳されているもの。長編では「メリディアン」(女たちの同時代北米黒人女性作家選⑤)朝日新聞社と「紫のふるえ」集英社。短編集「愛と苦悩のとき」山口書店。メアリ・ヘレン・ワシントンが編んだアンソロジー「真夜中の鳥たち」(女たちの同時代北米黒人女性作家選⑥)朝日新聞社に短編が二つ。

日本では「紫のふるえ」がわりあい注目されているが、わたしは「メリディアン」のほうが好きだ。これと「真夜中の鳥たち」を読むと、アリス・ウォーカーの黒人女性作家としての資質と位置とがわかるので、おすすめ。ただし、個人的な調査によれば、常備し

ている本屋はほとんどないので、各自注文しなければなりません。(八巻)

●玖保キリコさんの単行本は二冊あって「シニカル・ヒステリー・アワー」の(1)と(2)。白泉社。各三六〇円。どっちもおっかしいけど、ツネコちゃんの顔がかわいくなってるし、ツン太君に精彩があるから(2)の勝ちかな。これ、マンガです、念のため。(八巻)

●A・ブランキ「天体による永遠」

(浜本正文・訳、雁思社。二八〇〇円)「全人類は、その生涯の一瞬ごとに永遠である。トロー要塞の土牢の中で今私が書いていることを、同じテーブルに向い、同じペンを持ち、同じ服を着て、今と全く同じ状況の中で、かつて私は書いたのであり、未来永劫に書くであろう。」永劫回帰する宇宙全体

が監獄だった。だが、死んだ星たちが偶然ぶつかって生命に変わる。これをエビクロス以来の友愛の原理による継続革命論としてよむことができるだろう。(高橋)

●PROM(三宅様名+高橋悠治)9月9日(月)7時。渋谷TAKE OFF7。前売二千円、当日二千二百円(ドリンク付)。電話476・5297、402・3015。「プロウムー予見、予知」(フレーブニコフ)。意味を超えたことばで編まれたソング・ブックをめざして。エンソニック・ミラーージュでサンプリングされたティンゲリー・マシンなど。(高橋)

●「遊動都市」(樋口正一郎展)ジョイント・パフォーマンス。水牛楽団。9月15日(日)1時、4時の2回。千五百円。佐賀町エキジビット・スペース

ス電630・3243。アクリル彩色のベニヤをくみあわせた樹林の内外に散歩する音と声。(高橋)

●「東京ミーティング一九八五」9月6日(金)7時。大泉学園東映撮影所。前売三千、当日三千五百。8日(日)2時。立川市昭和公園。前売二千、当日二千三百。出演、近藤等則のI・M・A、サムルノリ、ソウル・ジャズ・バンド。連絡先 東京ミーティング実行委員会 電話03・446・2960

(田川)

去年より組み合わせがおもしろそうだ。

●「バリ島ブリアタン歌舞団」9月6日(金)〜10日(火)、22日(日)〜24日(火)。国立劇場。A五千、B四千、C三千。連絡先 日本文化財団 電話03・580・0031。

外国に行き慣れている。ケチャが一番

うまいといわれている。でも、ぼく、まだ見たことない。(田川)

●月にいちど、新宿のモーツアルト・サロンで「現代芸術セミナー」という催しをやっている。

これはおすすめものだと思う。名前はいかめしいけど、最新のヨーロッパ前衛演劇を大型ビデオで見るというだけの簡素なあつまり。いつもガラあきだから、ゆったりした客席でつめたい水割りやジュースのみながら、数時間、のんびり過ごすことができる。へたな映画を見るよりおもしろい。

九月は二十一日の六時から、オッフエンバックのオペレッタ「ファゴット氏」を、モリス・ジャックモンが演出した舞台。いつもの佐伯隆幸にかわって、今回はワッヘルマン某氏が解説にあたる。九〇〇円。(津野)

●「子供!」については本文中でふれたが、そのお手本をつくってくれたスタツズ・ターケルの新しいインタビュー集「よい戦争」が晶文社から出た。小生(津野)も編集者としてかわわっているから、これは自己宣伝だ。臆面もない。勸弁してください。アメリカ人は第二次世界大戦を「よい戦争」と呼んでいるそう。むかしの日本人の「聖戦」とおなじようなものだろう。

例によってターケルは一七三人のアメリカ人やドイツ人や日本人にインタビューして、ふつうの人の話しことばによる大戦史をつくりあげた。オーラル・ヒストリーをつくる運動が、世界中で同時多発的に起こっている。ターケルの仕事も、そのきっかけの一つになっているのではあるまいか。

今年のピュリツァー賞のノンフィクション部門受賞作。三二〇〇円。

